

ユダヤ難民と日本 (1940～41年) — ヴェイラント=ヤクボヴィチ家の足跡を辿りながら —

菅野賢治

菅野賢治

ユダヤ難民と日本 (1940～41年)

— ヴェイラント=ヤクボヴィチ家の足跡を辿りながら —

はじめに

2016年上半期、本学の在外研究制度により、オーストラリア、メルボルン大学に滞在する機会を得た筆者は、現地到着後ほどなく、ある研究会の場での短い講演を依頼され、第二次大戦期、日本での仮滞在を経て世界中に散っていたユダヤ難民の話題を採り上げることにした。そして講演の末部を「もしも聴衆の皆さまのなかに、その後、日本経由でオーストラリアに渡った元ユダヤ難民のご子孫とお知り合いの方がいたら、ぜひお教え下さい」と何の気無しに締め括ったのであった。「子孫」と言ったのは、日本に避難した時期からすでに75年の年月を経て、その当事者たちに会うことはほぼ不可能になっているはず、と考えていたからであり、また「何の気無しに」と言うのは、その20名程度の小さな集まりのなかに、かつて日本を経由したユダヤ難民たちの子孫を知る人が居合わせる確率などはほぼ無限小だろうと思っていたからだ。ところが驚いたことに、その日、聴衆の一人としてお越しくださいっていたメルボルン大学名誉教授アンス・フリートマン氏が「私は子孫ではなく本人を知っています」と申し出てくださり、後日、連絡を取って面会の場を整えてくださることになったのが、以下に紹介するワリア・カム (ポーランドでの出生名ワリルカ・ヴェイラント、1920年生まれ) である。

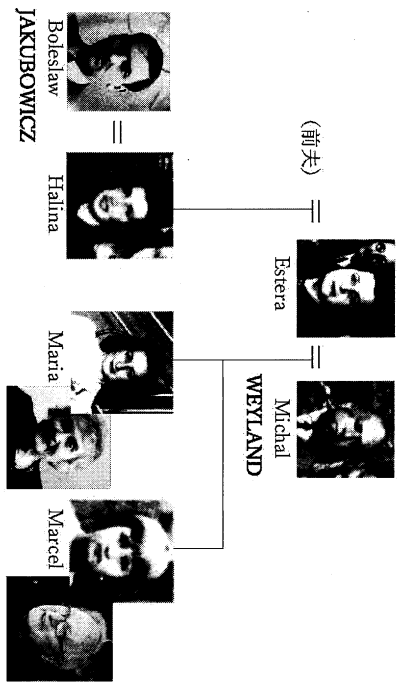
ワリアには7歳年下の弟でシドニー在住のマーセル・ヴェイラント (ワルツェル・ヴェイラント、1927年生まれ) がおり、ワリアとの面会を果たした後、筆者はシドニーにも飛んで、折しも『三輪車の少年』と題する自叙伝を刊行したばかりのマーセルにもインタヴューを行うことができた。

1941 (昭和16) 年、日米開戦直前の日本に仮逗留し、その記憶をことごとく鮮明に保ち続けてきたワリア、マーセルお二人の肉声と笑顔に直に接

東京理科大学紀要 (教養編)

第50号 抜刷

2018年3月20日



することのできた筆者の驚き、感慨は容易には言葉にならないが、ここではまず、ワリアとの面会の場を設定してくださったアンス・フリードマン氏とワリアの長女ヌーザン・ハースト氏、さらにワリア、マーセルの甥に当たり、筆者の日本帰国後も電子メールでさまざまな情報提供にに応じてくださっているシドニー工科大学・社会学教授アンドリュウ・ジャクボヴィチ氏に深い謝意を表することから始めたいと思う。

戦前のヴェイラント＝ヤクボヴィチ家

ポーランド中央部（当時の地図上では、むしろ西部）に位置するウッチの町は、19世紀、繊維産業の一大飛躍により「ポーランドのマンチェスター」との異名をとり、瞬く間にワルシヤワにつぐ第二の都市に成長した。戦前の人口およそ65万人は、ポーランド・カトリック系、ドイツ系、ユダヤ系の三者によってほぼ三等分され、20万人ほどのユダヤ住民も、ハンツド派（敬虔派）の厳格なユダヤ教徒から、多数派を占めるイディッシュ語使用の中間・貧民層を経て、もっぱらポーランド語使用の富裕層まで幅広い分布を見せていた⁽¹⁾。

その最後者、富裕ユダヤ層に生まれ育ったミハウ・ヴェイラント（1889-1942）は、ドイツで工業化学を学び、デンスマークの「オーフス油脂工業」社のポーランド支店長を任された企業人であった⁽²⁾。妻エステラ（1888-

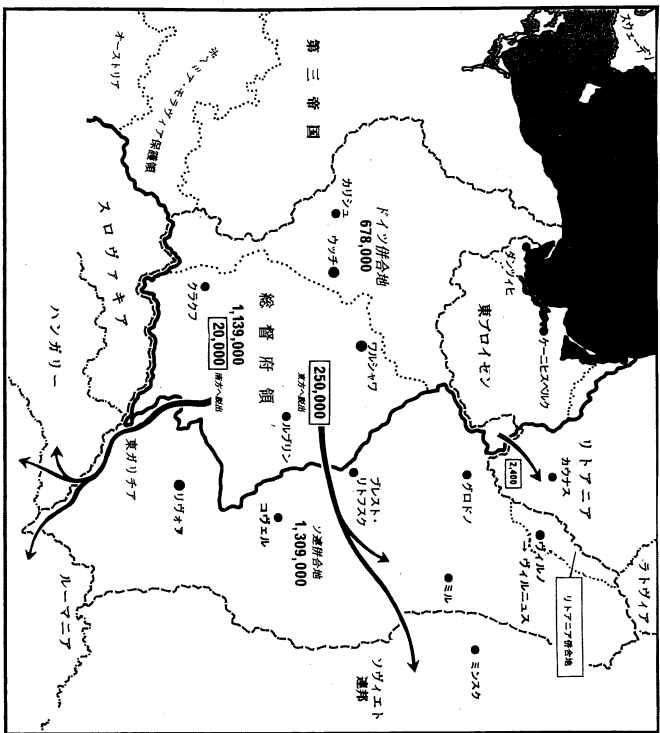
1977、旧姓フレイフェル）はカリシユ出身のユダヤ系女性であったが、夫婦ともにユダヤ教の実践からはすでに遠く隔たっていたらしく、ワリア（ワリルカ）、マーセル（マルツェル）とも、彼らの幼少・青年期をつうじ、家庭内でユダヤ教信仰が実践されていた記憶をまったく留めていない⁽³⁾。かるうじて父ミハウが、年に二、三度、ユダヤ教の大祭の折にマーセルを伴ってウッチの大シナゴークに出向くことがあったが、それも信仰の行為というより、地元ユダヤ共同体との連帯を確認するための象徴的な身振りではなかったが、とマーセルは振り返る⁽⁴⁾。むしろ、毎年のクリスマスにワリアが中心となって意匠を凝らした飾り付けを行っていたという記憶⁽⁵⁾から浮かび上がってくるのは、キリスト教への改宗はしないまま、周囲のキリスト教文化に自然に溶け込んでいこうとする、いわゆる「同化」ユダヤ家庭の姿だ。

エステラの最初の婚姻による娘ハリナ（1909-2002）は、ワルシヤワの商業高校に学び、ウッチの進歩派新聞『レゾヅリカ（共和国）』の編集部に職を得たが、彼女の学生時代、ポーランドの教育機関に導入され始めたユダヤ出自学生の入学制限（ヌマルス・クラウスス）、ならびに講堂の奥に設けられた専用席（通称「ゲットー・ベンチ」）にユダヤ出自の学生たちを座らせるという差別待遇から受けた心の傷は、彼女の内にあって生涯消えることがなく、戦後、オーストラリアに移住したハリナは、故国ポーランドの土は二度と踏まないと誓い、オーストラリアで出会う非ユダヤ系のポーランド出身者にもきわめて冷淡な態度を貫き通したという⁽⁶⁾。

義娘のこの苦しい体験も関係してのことであろう、父ミハウは、実娘ワリアが高等教育を受ける場所としてポーランド国内ではなく、ベルギー、アントワープ（アンヴェール、アントウエルペン）の高等商業学院を選ばせた。しかし1939年8月23日、19歳のワリアが夏期休暇でアントワープからウッチの家族のもとへ帰省中に「独ソ不可侵条約」が締結される。不穏を察したミハウは、ベルギーへの帰り支度を始めたワリアを押し留め、一家が離れ離れにならないようにした。もしもこの時、ワリアが新年度に間に合わせるといって、ドイツを西に向けて横断中に9月1日を迎えてしまっていたら……。この先、1946年、オーストラリア到着までの7年間、ヴェイラント＝ヤクボヴィチ家の命運、生死を分ける何十、何百という「もしもあの時」の最初の一つがそれであった。

ウツチからザイルニュスまでの逃避行

1939年9月1日(金曜)、ドイツ軍がポーランドに侵攻し、同3日(日曜)、英・仏がドイツに宣戦布告するに及んで、第二次世界大戦の火蓋が切られて落とされる。ウツチの町は、その9月3日からドイツのシュトゥーカによる爆撃を受けたが、その時点でワーセセルは、ほどなくポーランド軍の英雄たちがドイツ軍をベルリンまで押し戻してくれるだろう、と信じて疑わなかったと回想する(7)。しかしその日の昼、『レゾブリカ』紙の編集部で最新情報を入手して戻った姉ハリナは、一刻も早く東に向けて避難すべきと



----- 戦前のポーランド国境
 ———— 第三帝国の東部国境(1939年10月以降)

1939年9月、ドイツとソ連によるポーランド分割とユダヤ系住民の避難

(「ヤチン・ギルバート『ホロコースト世界地図1918-1948』「地図33」をもとに作成)

訴え、父ミハウもそれに同意した。こうして当時、結婚したばかりのハリナの夫ボレスワフ・ヤクボヴィチ(1905-90、愛称「ボレク」)を含む一家六人は、若干の貴金属と宝石類以外、取る物も取りあえず、5人乗りの自家用車、小型フォードにぎゅうぎゅう詰めとなって、まずは北東の首都ワルシャワを目指した。20数年前、第一次大戦にともないドイツに占領されたウツチも3年後には自由を取り戻したではないか、として、この時、出立に踏み切らなかったユダヤ系住民(ゼエイラント=ヤクボヴィチ家の近親者の大半を含め)が、数日後、破竹のドイツ軍進撃を受け、以後、もはやいずこへも脱出不可能となったまま、ほぼ全員、絶滅政策の煙と消えたことを考えると、この時、自分たちの命を救ったのは、義姉ハリナの的確な判断力と、義娘によるその「指令」を素直に受け入れた父ミハウの従順さであった、とワーセセルは振り返る(8)。

ワルシャワ郊外でガソリン切れとなったフォードを乗り捨て(この時、ボレクがフォードを嚴重に施錠し、その鍵を後生大事に持ち続けたことが一家永年の語り草となる)、郊外電車でワルシャワ市内に到着した彼らは、その夜を『レゾブリカ』紙ワルシャワ編集部で働くハリナの知人のアパルトマンで、ほかの20数人の避難者たちとともに過ごした。数日後、新聞配達用トラックの荷台に乗り組んだ一行は、ワルシャワ南東100kmほどに位置するルヴリンに到着し、やはり現地の『レゾブリカ』紙編集者の手配により、ある集合住宅の一室に避難先を見つけることができた。翌日、ドイツ空軍による激しい爆撃により、その建物は一部大きく損壊し、死傷者も出すこととなったが、幸いにして彼らが借り受けた部屋は爆撃を受けた部分の反対側に位置していたため無事であった。

数日後、ふたたび新聞配達トラックで東に向けて再開された逃避行は、途中、ドイツ空軍による爆撃と機銃掃射により、きわめて危険なものとなった。ある所でトラックが故障してからは徒歩で、しかも悪路で足を挫いた父ミハウを皆で抱えながら、夜を徹しての行軍であった。ある日の明け方、ようやくヴグ川(すでにリツベントローヅ=モロトフ協定により独ソ間の新たな国境になることが密約されていた川)に達したが、そこにはポーランド軍の兵士たちがいて、橋の爆破作業の準備(しかし何のためか?)をしていた。一行が東岸に渡らせて欲しいと懇願しても、将校は「数分後に爆破することになっているため不可」の一点張りであった。そこでハリナが——のちのワーセセルの回想によれば、舞台上のサラ・ベルナル

さながら——前に進み出、「もしも私たちを渡らせてくれなければ、私はあなたの目の前で川に身を投げる。私は死に、そしてあなたは死にすることについて、生涯、罪の意識を背負って生きていくことになるのです」と毅然たる態度で言い放ったという。一瞬たじろいだポーランド人将校は、対岸に向けて「行け」の手合図をし、かくして一行が渡り終えた直後、橋は轟音とともに吹き飛ばされたという⁽⁹⁾。

こうした過酷な徒歩行軍の末、一行はコヴェル(現ウクライナ、コヴェリ)の町に辿り着いたが、そこにはすでに赤軍の兵士たちが、ソ連領内では手に入らない嗜好品や消費財を手当たり次第、渉猟する姿が見られたという。そして一行がコヴェルで聞きつけた噂の一つに、ソ連政府が北東の都市ヴァイルノ(リトアニア名：ヴァルニユス)をほとんどリトアニアに「返還」させるらしい、というものがあつた。つまり、その時点でポーランド領であつたヴァイルノにポーランド人として避難しておけば、同市のリトアニア返還により、自動的にポーランドの「国外」に出ることができるとの噂だ。こうして一行は、コヴェルからグレスト・リトフスク、グロドノを経て北へ向かう、まさにすし詰めの列車に乗り込み、一昼夜かけて目的地ヴァイルノに到着したのであつた。日付は不明だが、列車がいまだ曲がりなりにも運行していたことから、ソ連軍によるポーランド東部への進軍が始まる9月17日より前であつたと推察される。

こうして1939年9月前半、ポーランド避難民の道行きは、逃げる傍から背後で次々とシヤッター扉が下ろされていくような、間一髪の迷路の様相を呈している。

リトアニアから日本へ

1939年9月17日、東ポーランドに進駐したソ連軍は、同25日、バルト三国(エストニア、ラトヴィヤ、リトアニア)にも部隊を駐留させ、これら三国を事実上の軍政下に置いた。10月10日には、ヴェイラント＝ヤクボヴィチ家の一行がコヴェルで耳にした噂どおり、ヴァイルノ(ヴァルニユス)地区がリトアニアに「返還」され、そこに多数流入していたポーランド人(ユダヤ系、非ユダヤ系の別を問はず)は、居ながらにして一夜のうちに在リトアニア外国人難民となつた。12月にはカウナスを首都としてきた従来のリトアニアと新しく併合されたヴァルニユス地区のあいだの通行が自由

となつたため、難民たちは、在カウナスの各国大使館、領事館を一つ一つ訪ね歩き、ヨーロッパ脱出の方途を探り始める。翌1940年1月、ナチス・ドイツが占領を完遂したポーランド西部のユダヤ住民に移動を禁じたのに続き、3月、ポーランド東部とリトアニアの国境がソ連によって封鎖されたため、いったん東部のソ連併合地に逃れ出ているユダヤ難民たちも、そこからヨーロッパ脱出のよすがをリトアニアの地に求めることができなくなった。それまでに、ポーランドから新しいリトアニア領へおよそ1万5千人(従来のリトアニア・ユダヤ人口の一割に相当)のユダヤ難民が流入していた。40年6月、ソヴィエト・リトアニア共和国を成立させたソ連は、現地に滞留するこれら難民たちに対し、コミンテルンに忠誠を誓うソ連人になるか、さもなければ無国籍者となるか、二者択一を迫ることとなる。

一方、日本政府は、ドイツ、ソ連双方の軍事行動に関する情報収集の要衝としてリトアニアのカウナスに白羽の矢を立て、当時フィンランドの代理公使だつた杉原千敏にカウナス日本領事館の開設を命じていた。1939年11月、カウナスに着任した杉原は、翌12月、ユダヤ教のハスカ祭の折、地元ユダヤ教徒ガノール家の食卓に幸子夫人とともに招かれ、居合わせたポーランド・ユダヤ難民ローゼンブラットから、ナチス軍靴下のポーランドにおけるユダヤ迫害のおぞましい実態について説明を受けている⁽¹⁰⁾。

ヴェイラント＝ヤクボヴィチ家の六人がヴァルニユスで過ごした一年五ヶ月ほどについて、ワーセルは、それが「ほぼ普段どおりの生活」であつたと回想する。地元難民支援委員会のおかげで市内に部屋を借りることができ、食糧もリトアニア人たちの差し入れにより大いに助けられたという⁽¹¹⁾。ミハウとボレスワフは、携えてきた貴金属・宝石類の換金に奔走するかわら、リトアニアからさらなる新天地に向けて出立する手段に関する情報を集め、エステラは日に二度の食事を提供する難民専用の食堂で甲斐甲斐しく働いた。ハリナは職業訓練コースに通つて服の仕立ての技術を身につけ(これがのちの上海時代、大いに役立つこととなる)、マリヤも子守や家庭教師を請け負つて生計を助け、13歳のワーセルは、結局、四つもの学校を転々としながら学業を続けた(イディッシュ語使用のユダヤ系学校、ポーランド難民専用の非公認学校、リトアニア語使用の公立学校、そして40年6月、ソヴィエト・リトアニア共和国成立にともない、ソ連当局の認可を受けたポーランド語使用の学校)。

六人ともポーランドのパスポートを所持していなかったが、カウナスの

英国領事館でポーランド国籍証明書の取得には成功した。これは、初めパリ、ついでアンジェに避難したポーランド亡命政府が、1940年6月、フランス敗戦にもなつてロンドンに移転したことから、カウナスの英国領事館がポーランド亡命政府の業務を一部代行するようになっていたためである。ワーセルの回想録に転載された「証明書」には1940年7月24日という発行の日付が読み取れるが⁽¹²⁾、おそらくミハハとボレスワフは、この「証明書」を取得し、オランダ領事館で領事代理ヤン・ツヴェルテンダイクの機転による有名な「キユラソー・ヴァザ」⁽¹³⁾を手にした上で、日本領事館に赴いて長蛇の列に並び、杉原領事代理に日本通過ヴァザを申請したのである。今日、公開されている「杉原ヴァザ」のリスト上では、第850番にBoleslaw Jakobowiczとの綴り、第861番にMichal Wejlandとの綴りで、ともに1940年8月2日、日本通過ヴァザが発給されたことが記されている。残念ながら、ミハハとボレスワフに発給された「杉原ヴァザ」の現物は、その後、遺失し、ワリア、ワーセルともに、父と義兄のちにカウナスの日本領事館や杉原干敏について印象などを語っていたかどうか、記憶に留めていない。しかし、ワーセルは回想録のなかで杉原を「日本人の天使」と称え、筆者による直接インタビューにおいても、「われわれの人生における英雄」として最大級の讃辞を捧げている⁽¹⁴⁾。

またワリアもワーセルも、当時、年若く、必要書類や金銭面での手続きを父と義兄に任せきりにしていたため、彼らがいかにしてソ連のインツェリヤストから六人分のソ連通過ヴァザとシベリア鉄道の切符を発行させるに漕ぎ着けたか、そしてそれに必要な米ドルの現金（というのもソ連当局は、外国人の自国領通過にかかる費用をすべて米ドルで支払うよう求めていたので）をいかにして工面したのか、覚えていない。そこにはおそらく現地リトアニアの難民救済委員会を背後から強力に支える国際ユダヤ団体（とりわけ「ジヨイント」）の采配があつたであろうし、また、リトアニアに流れ込んだポーランド・ユダヤ難民たちのあいだでいつしか共有されるにいたつたソ連通過実現のためのノウハウも功を奏したにちがいない。

のちに父ボレスワフ、母ハリナが、息子アントリユー・ジヤクボヴァイチに語つたところによれば⁽¹⁵⁾、当時、ソ連を通過して日本行きを希望するユダヤ難民たちがソ連当局にその旨を申し出ると、まず一人ずつ個室に呼び出され、内務人民委員部（NKVD）の担当官から、職業、学歴、資格、使用言語などについて詳しく質されるのが常だつたという。そこでうつかり

ソ連側が欲しがりそうな技能を身につけているとか、ロシア語その他の外国語に長けている、などと口を滑らせてしまうと、NKVDの係員は、給与や住居面での好条件をちらつかせながら、ソ連国籍の取得、ソ連国内への残留を勧め、通過ヴァザやシベリア鉄道の切符の件を棚上げにしてしまう恐れがあつた。そこで遵守すべきコツは、いかに自分たちが職能面で見劣りがし、語学力も乏しい、ソ連社会にとって役立たずの存在であるか、NKVD側に印象づけることであつた、というのだ。

ゾラフ・ヴァルハラフテイクの推計によれば、1940年9月末で二千名以上の在リトアニア・ユダヤ難民が、いわゆる「キユラソー・ヴァザ」と「杉原ヴァザ」を併せ持ち、ソ連出国の手続きに入れる状態にあつたといふ⁽¹⁶⁾。ヴァザ一通あたり平均二名が移動を予定していたと考えると、四〜五千名が、いわゆる「杉原サヴァイザー」の予備軍を構成していたことになる。しかし、1940年7月から翌41年8月までの14ヶ月間、実際にその手段を用いて日本に到来したユダヤ難民は二千七百名ほどに留まり、うちヴェイラント＝ヤクボヴァイチ家を含む千四百名ほどの日本入国は、1941年2〜3月の二ヶ月間に集中していた⁽¹⁷⁾。

出立しなかつた推定二千名前後の人々のうち、NKVDの甘言、推奨を受け入れてソヴァエト・リトアニア残留を選んだ人々の割合は知る由もない。確かなことは、「キユラソー＝杉原ヴァザ」の取得までいたりながら、なお踏ん切りがつかなかつたり、資金面で頓挫したりしてしまつた人々、さらには当初からリトアニア出立の意志がなかつた一万人前後のポーランド・ユダヤ難民が、1941年6月、ドイツのバルト三国侵攻により、土着のリトアニア・ユダヤ人口16万人もろともナチスの懷中に転がり込み、第二次大戦後半をつうじて、まさに背筋を凍らせるような死亡率——正確を期していふならば「行方不明率」——を記録したことだ。

かくしてポーランド国籍証明、「キユラソー・ヴァザ」「杉原ヴァザ」、ソ連通過ヴァザ、ならびにシベリア鉄道切符という五点セットを幸いにも手にすることのできたヴェイラント＝ヤクボヴァイチ家の六名は、1941年2月のとある日、ヴェイルニユスを後にし、まずモスクワにいたる。シベリア鉄道への乗り換えの合間に市内見物をしようと地下鉄でクレムリン宮殿に繰り出したまではよかつたが、駅に戻ってみると、列車が定刻より早く出発していた（理由不明）。電光石火タクシーに飛び乗り、次の駅で列車に追いつくことで事なきを得たといふ⁽¹⁸⁾。そこからワリアの記憶によれば2週

間以上続いたシベリア鉄道の旅は、読書とトランプで無聊を慰めながらも、昼夜を問わず乗り込んでくるソ連官憲による所持品検査（と称する金品強奪）をもって、決して心休まるものではなかった。ワリアによれば、「ロシアの地を離れる最後の瞬間まで、本当に彼らが私たちを通過させてくれるか、わかったものではなかった」という⁽¹⁹⁾。

かたやマーセルの方は、極東のユダヤ自治州ビロビジャンの駅に列車が停車した時のことを鮮明に覚えていいる。「われわれの列車の到着を待って、ホーム上でわれわれに歓迎の意を表してくれた〔ビロビジャンの〕ユダヤ人たちの顔に、私は悲しみと、暗く沈んだ諦念のようなものを強く感じ取った。われわれは、それまで持っていたものをすべて失った難民であったが、彼らの方では、そのわれわれといつでも喜んで入れ替わってやる、と言っているように見えた。」⁽²⁰⁾ さらにマーセルは、ビロビジャンにせよ、一時ナチスが真剣に検討の俎上に載せたことのあるマダガスカルにせよ、地上のどこかに人工的なユダヤ居住地の設置案を思い巡らす人々は、それ以前から存在している地元住民の立場をどこまで考慮しているのか、はなはだ疑問であるとも言っている。

こうして極東の終着駅ウラジオストクに到着した彼らは、3月10日、日本海を横切って敦賀港に向かう「欧亜連絡船」に乗り込むための最終関門として、ソ連税関を通過した。当時の「福井新聞」(1940年3月15日夕刊)の記述から、彼らが乗船したのは翌11日出航、13日敦賀着の「天草丸」であったことがわかる。

天草丸—予定を遅れ入港

欧亜連絡船天草丸は浦汐から船客三百五十「一字不明」名をのせて予定よりおくれで十三日夜「一字不明」時敦賀に入港十四日朝八時から検疫を開始したが「中略」歐洲の戦禍をのかれて流浪の旅をつづけてゐるユダヤ系十七ヶ国人三百六十一名が来教したがこの内南北米に赴くワビ教徒八十名も居り、見せ金も査証不備の者多数あるため当局をやままして居るが上陸は同日午後許可された⁽²¹⁾

ワリアもマーセルも、到着した敦賀のイメージとして、満開の桜と花柄の着物をきた可愛らしい女の子たちが強く印象に残っている、としているが⁽²²⁾、敦賀における桜の開花時期として3月14日はいかにも早過ぎる。

おそらくは、その後、神戸で飽くことなく眺めた桜のイメージが、記憶のなかで週及現象を起し、敦賀の思い出しに事後的に重ねられていったのではなからうか。いずれにせよ、絶えざる不安のなかで横断した氷雪のシベリアを経て日本の敦賀への船旅は、マーセルの言葉によると「単に一国から隣接する別の国への横断にとどまらず、ある世界から別の世界へ、冷酷な冬から愛らしい春への移行であった。」⁽²³⁾

おそらく、1941年3月13日（木曜）の入港が晩にずれ込んだため、難民らは船内で一夜を過ごし、翌朝、税関手続きを済ませて、北陸線で米原経由、神戸へと向かったのである。この時、350人もの新着難民を出迎えるに神戸のユダヤ団体から人が出ていたのか、彼ら全員が一本の同じ列車に乗り込めたのかなど、具体的な部分についてはワリアもマーセルも完全に記憶を欠落させている。うち続く極度の緊張から解放された時、人間の記憶機能というものは、一瞬、弛緩してしまうものなのかもしれない。

神戸、そして上海へ

神戸には、その時点ですでに千人規模のポーランド・ユダヤ難民が滞在して、先住のロシア・ユダヤ人たちが立ち上げた「神戸ユダヤ人委員会」(Jew Com Kobe)の行き届いた支援のもと、仮住まいを始めていた。ヴェイラント＝ヤクボヴィチ家の六名も、神戸駅から直接、あらかじめ委員会が手配していた借家へ、ほかの難民数名とともに案内された。それは典型的な日本家屋の離れで、母屋には家主とその妻、そして家主の愛妾とおぼしき女性の三人が仲睦まじく寝起きしていたが、普段、彼らと顔を合わせた時、声を掛け合ったりすることは絶えてなかったという⁽²⁴⁾。結局、彼らの神戸滞在は同年9月までの六ヶ月であったが、その間、マーセルは、借家から徒歩の距離にあるアメリカ人メソジスト宣教師たちの私塾に通って英語を学び、小遣いに余裕のある時には、元町の「大丸」最上階の食堂で焼きそばを食べるのを楽しみにしていた。

難民たちは、アメリカ人のユダヤ人団体「ジョイント」の資金援助をうけた「神戸ユダヤ人委員会」から、一日一人当たり1円20銭の生活費を支給されていた。1941年の1円20銭を今日のおよそ3,500円相当と見積もれば、6人家族の場合、一日に2万1千円、一ヶ月で60万円以上の支援が受けられる計算になる。そこから家賃を差し引いたとしても、慎ましく暮らすには

十分な額だったのではないか。ワーセルの回想によれば、時々、宝塚や大阪市内の見物に行ったり、日本の思い出の品として着物の帯を買ったりするくらいの余裕があったという。さらにヴェイラント＝ヤクボヴィチ家の場合、娘婿のボレスワフが会計士として「神戸ユダヤ人委員会」に臨時職を得たこともあって、家計には若干の余裕があったようだ。

しかし、金銭面はともあれ、問題は次なる渡航先である。

同じユダヤ難民でも、前年1940年7～9月をピークとしてシベリア経由で日本にやってきた推定2,500名ほどのドイツ・オーストリア籍のユダヤ難民は、横浜で貿易商を営むドイツ・ユダヤ人ハイッツ・マイベルゲンらの支援のもと、横浜山下町一帯でしばし羽を休めた後、順次、新たな目的地に向けて再出発していた⁽²⁵⁾。彼らは、当時、日本とドイツのあいだで締結されていた査証相互免除協定⁽²⁶⁾の効力により、一定期間内であれば日本滞在資格を問われることがなく（よって「杉原ヴィザ」とは無関係）、また、20世紀初頭以来、ドイツ・オーストリアから、多数、南北アメリカに移住を果たしていた親戚や友人たちを頼りにすることができたため、親族呼び寄せや身元引き受けの制度を活用しての新天地への出立が比較的（あくまでも比較の問題として）容易であった。しかし、ポーランド・リトニア出自のユダヤ難民たちは別である。彼らのなかには新大陸に縁故を有している者が少なく、また、ドイツのパスポートを所持しているドイツ・オーストリア籍の難民に比べると、国としては消滅同然とみなされたポーランド、リトニア出自の人々は、第三国への入国審査に際して圧倒的に不利であった。

かくして、横浜に仮滞在した2,500名ほどのドイツ・オーストリア籍のユダヤ人たちは、時間と手間をかけながらではあっても、1941年の夏までにはほぼ全員、新天地に向けて旅立つことができたのに対し、神戸に到来した2,700名ほどのポーランド・リトニア出自のユダヤ難民たちのおよそ半分弱、1,200名ほどは、第三国への出立の目処が立たないまま、神戸に滞留してしまふ。

この時、本来、杉原が発給した日本通過ヴィザの有効期限がわずか10日であったにもかかわらず、日本当局がこれらの人々の数ヶ月にもわたる不法滞在を目をつぶったのはなぜなのか？ この点について、実のところ一次資料に依拠した歴史考証はいまだなされていないのが実情であるが、のちにみずからユダヤ教に改宗することとなるヘブライ語学者、小辻節三

(1899-1973)の尽力があったことは疑いない⁽²⁷⁾。「神戸ユダヤ人委員会」の活動を献身的に支えていた小辻は、彼みずからの回想によると、日本通過ヴィザの期限について、当時の外務大臣、松岡洋右に相談し、「ヴィザを出すのは外務省だが、出入国管理そのものは自治体、神戸の場合は兵庫県の管轄である。よって兵庫県さえ黙認するならば、政府としては介入することはない」とのアドバイスを受けたとされる⁽²⁸⁾。そして実際に小辻は、兵庫県の担当局に懇命に取り入り、滞在期限を優に過ぎているユダヤ難民たちの境遇に対する理解を求め続けたのであろう。

しかし、時は1941（昭和16）年の夏、真珠湾攻撃による日米開戦の数ヶ月前である。日米政府間で妥協案を探る水面下の交渉は思うように進まず、同年7月から8月、アメリカから日本に対する制裁として輸出禁止や資産凍結といった措置が次々と講じられるようになった。日米間での資産凍結は、取りも直さずアメリカのユダヤ支援団体から「神戸ユダヤ人委員会」への資金送付が不可能となることを意味する。そこへ近衛内閣の改組（7月18日）により、小辻節三の嘆願が理解があった松岡洋右が外相の座から外され、豊田貞次郎に代わられたことも影響したのか、神戸に滞留しているユダヤ難民を「急速に上海に向けて退邦せしめ」るべきことを訴える兵庫県知事・坂千秋の進言が政府に容れられ、8月から9月にかけて、神戸＝上海間を航行する鎌倉丸、浅間丸、龍田丸、大洋丸という四隻の船で、一度に百数十名から三百数十名のポーランド・リトニア出自のユダヤ難民が上海へ移送されていった⁽²⁹⁾。

ヴェイラント＝ヤクボヴィチ家の六名も、集団移送の最終便となった大洋丸で、41年9月17日、199名の同胞とともに神戸をあとにしている。予定通りならば、船中二泊三日で9月19日に上海に到着するはずのところ、暴風に見舞われ、翌20日午前7時の延着となった⁽³⁰⁾。神戸には、その後も病者とその看護者、幼児同伴者、神学校代表者など、即時の移送が困難な128名が残ったが、状況が整い次第、五月雨式に上海へ移動させられたものと思われる⁽³¹⁾。

当時、次女のワリアには、すでにリトニアのヴェルニウスで知り合い、のちに再び神戸で落ち合って恋仲になった、ステフアンという名の同じポーランド・ユダヤ出自の恋人がいた。飛行機の製造に携わるエンジニアであったステフアンは、その技術が買われてカナダの入国ヴィザを取得し、神戸からカナダへ出立することができた。その際、ワリアには、現地に到

着し次第、すぐに彼女を婚約者として呼び寄せる手続きに入る、と言いつつ

残していった。そこでヴェイラント家の人々は、とにもかくにも大洋丸で上海まで一緒に移動しながら、ワリアにはいつでもカナダへ旅立つ態勢を整えさせる。むしろ、ワリアが先にカナダへ行き、それなりの居住権を手にした上で、上海の家族全員を呼び寄せることができるようにするためである。しかし1941年10～11月の段階で、すでに上海から北米に向かう船の切符の手配はきわめて困難になっており、かるうじて入手できたのは、オーストラリア、シドニー行きの切符だけであった。そこでワリアは、1941年11月、単身、上海を立ち、香港、インドネシアを経由して、12月初め、シドニーに到着する。そこで別の船に乗り換えてカナダへ向かおうとした矢先の12月8日、真珠湾攻撃により太平洋戦争が勃発。太平洋を渡る船便は、ほぼ全面的にブロックされるという事態に至った⁽³²⁾。

こうして21歳のワリアは、単身シドニーにおいてカナダの婚約者からの音信を待ちながら、家族のいる上海に後戻りもできないという状態のまま、そこから四年間、太平洋戦争期を過ごすこととなる。当然、彼女と五人の家族は、ほどなくのカナダでの再開を期して別れたのであって、そこから1946年まで、五年間もの別離になるうとは予想だにしていなかったわけである。しかも翌1942年、父ミハウが、上海で病気により死去し（もともと頸筋にあつて良性と診断されていた腫瘍が、避難の労苦、心労のせいから悪性に転じたもの）⁽³³⁾、前年11月、シドニー行きの船を見送ってくれた父の姿が、ワリアにとっては見納めとなった。

われわれはまだ、1941年12月、太平洋戦争開戦期に差し掛かったにすぎず、ヴェイラント＝ヤクボヴィチ家の避難生活は、日本軍政下の上海に舞台を移し、その先五年も続くわけであるが、ここでその続きを語るための紙幅は尽きた。彼らの上海体験については、先住ユダヤ居留民、ならびに先行ユダヤ難民集団の存在とあわせ、稿を改めて紹介することとする。

*本研究はJSPS科研費、平成29～32年、基礎研究(C)(1)課題番号17KK02041の助成を受けたものである。

註

- (1) Marcel Weyland, *The Boy on the Tricycle*, Brandt & Schlessinger, NSW, 2016 p.16.
- (2) 以下、ヴェイラント＝ヤクボヴィチ家に関する伝記情報は、上記ウェーセルによる自叙伝のほか、ワリアの口述を長女スーザン・ハーストが書き留めた「Maria's Story: "People Like Us"」(未公開)、ならびにアンソリエー・ジャクボヴィチ氏から筆者に直接もたらされた証言による。また、上掲の家系図に用いた写真も、両家の私蔵コレクションから、ご家族の了解を得て使用している。
- (3) 筆者によるワリア(2016年6月13日、8月1日)ならびにマースセル(同8月4日)へのインタビュー。
- (4) Weyland, *ibid.*, p.18.
- (5) *Ibid.*, p.24.
- (6) *Ibid.*, p.15.
- (7) *Ibid.*, p.33.
- (8) *Ibid.*, p.34.
- (9) *Ibid.*, pp.38-39.
- (10) ソリー・ザノール『日本人に救われたユダヤ人の手記』、大谷聖志郎訳、講談社、1997年、81頁。
- (11) Weyland, *ibid.*, p.50 ならびに前掲「Maria's Story: "People Like Us"」。
- (12) Weyland, *ibid.*, p.55.
- (13) ヤン・ツヴァテルテンダイクのいわゆる「キユラソー・ザイザ」について、本人の子孫の所在を突き止めつつなされた最新の重要な研究成果として、北出明「ユダヤ難民を救ったもう一つの「命のビザ」」、『潮』、2017年9月、52-59頁を参照のこと。
- (14) Weyland, *ibid.*, p.49 ならびに2016年8月4日、筆者によるインタビュー。
- (15) 同日、筆者によるアンソリエー・ジャクボヴィチへのインタビュー。
- (16) ソラフ・バルハフテイク『日本にきたユダヤ難民』、滝川義人訳、原書房、1992年、143頁。
- (17) 同、160頁。
- (18) Weyland, *ibid.*, p.63.
- (19) 前掲「Maria's Story: "People Like Us"」。
- (20) Weyland, *ibid.*, p.64.
- (21) 1941年8月30日に兵庫県が作成した「避難猶太人現存者表」(外交史料館

所蔵)の上でも、ヴェイラント=ヤクボヴィチ家の日本入国日付「三・一四」を確認することができる。

(22) Weyland, *ibid.*, p.66 ならびに前掲 « Maria's Story: "People Like Us" ».

(23) Weyland, *idem.*

(24) 残念ながら、この家屋の住所を示す記録が残っていないため同定は不可能であるが、神戸市文書館の編集による神戸市史紀要『神戸の歴史』第26号(2017年)の巻頭に掲載された地図上、北野町、山本通、中山手通一帯のいずこかであったと推測される。これらユダヤ難民の神戸滞在について、さまざまな情報提供に応じてくださっている神戸市文書館、松本正三館長にこの場で深くお礼申し上げます。

(25) S. Inui, H. Meibergen, *Exodus 20th Century*, 1985, p.33.

(26) Pamela Rotter Sakamoto, *Japanese Diplomats and Jewish Refugees: A World War II Dilemma*, Praeger Pub, 1998, p. 50.

(27) *Ibid.*, p.142.

(28) 山田純夫『命のビザを繋いだ男, 小辻節三とユダヤ難民』, NHIK出版, 2013年, 91頁。

(29) 岩田隆義「神戸とユダヤ難民」, 前掲『神戸の歴史』, 45頁。

(30) 上海の日本語新聞『大陸新報』(国立国会図書館イクロワイルム)には、浅間丸、龍田丸、大洋丸の到着を報じる記事(それぞれ8月24日朝刊, 8月31日朝刊, 9月21日夕刊)が見える。

(31) 岩田, 前掲, 46-47頁。

(32) Weyland, *ibid.*, p.82 ならびに前掲 « Maria's Story: "People Like Us" ».

(33) Weyland, *ibid.*, p.18.

Japan and Jewish Refugees (1940-1941) — In the Weyland-Jakubowicz family's footprints —

Kenji Kanno

Abstract

During my six-month sabbatical in Australia in 2016, I was amazed and overjoyed to make the acquaintance of Maria Kamm, née Weyland, and Marcel Weyland. These nona- and octogenarian sister and brother of Polish-Jewish origin are former refugees who in 1941 briefly stayed in Kobe, Japan, travelling with their 'Sugihara visas', nowadays known around the world.

Together, Maria, Marcel, their parents, elder sister and brother-in-law Jakubowicz, all left Lodz at the very beginning of the German invasion in September 1939, reached Wilno, which was then in Poland and was soon to become Vilnius, Lithuania. They were granted their 'Sugihara visas' at the Japanese consulate in Kaunas in August 1940 and set out on their adventurous journey of escape to the Far East, via Siberia, in February 1941. The Japanese steamship *Amakusa-maru* took two nights to take them from Vladivostok to Tsuruga, Fukui Prefecture. From there, the 'Jew Corn Kobe' operated by Russian Jewish immigrants administered their precarious status as refugees in Japan on the eve of Pearl Harbor.

Based on Maria's personal account, Marcel's autobiography *The Boy on the Tricycle* (2015) and testimony provided by their nephew Andrew Jakubowicz (professor at the University of Technology Sydney), this historical reconstruction also uses Japanese archival documents (the Ministry of Foreign Affairs archives, local newspapers, Kobe City archives).

Within the limitations of the article's length, this initial study concludes with the Weyland-Jakowicz's move to Shanghai, China, in September 1941, however, subsequent works will complete the account of this incredible family saga.